

「早春に浙江省の水辺と美食を訪ねる旅」

2015年11月15日

2015年度(2016年3月催行予定)の校友会の中国旅行は、“長谷川先生と行く中国旅行”が1994年に始まって以来第20回目となる。前校友会々長の長谷川先生が、第10回を最後に引率を降りられてから、諸先生にお願いしたり独自に中国旅行を続けて、早、10回となった。そこで、中国で過去から文化が発達した場所の一つとして、江南の地を選んだ。この地はすでに1996年の第3回で杭州(西湖)・紹興を、1998年の第5回で蘇州・同里・周庄・甬[Lù]直を訪れている。

江南は「上有天堂，下有蘇杭」という言葉にある通り、「魚米之郷」や「蘇湖熟天下足」(蘇は蘇州で太湖の東側，湖は湖州で太湖の南側)と言われ，地上の楽園であり天下の台所であった。

今回は第3回を20年ぶりに再現し，特に江南の生産力や輸送力あるいは美観の源となった水辺を廻り，そこそこの美食を味わって，900年前の宋代の繁栄のかけらを体感したいと考えている。

一 地 誌

☆ 位置と気候

浙江省は，北は江蘇省と上海市，西は安徽省と江西省，南は福建省と境を接し，東は東シナ海に面している。面積は約10万km²で日本の約27%であり，菱形をしている。省北東部の平野および盆地や海岸沿い以外は，7割が丘陵地帯や山地である。なお，省名の一字名は「浙」である。



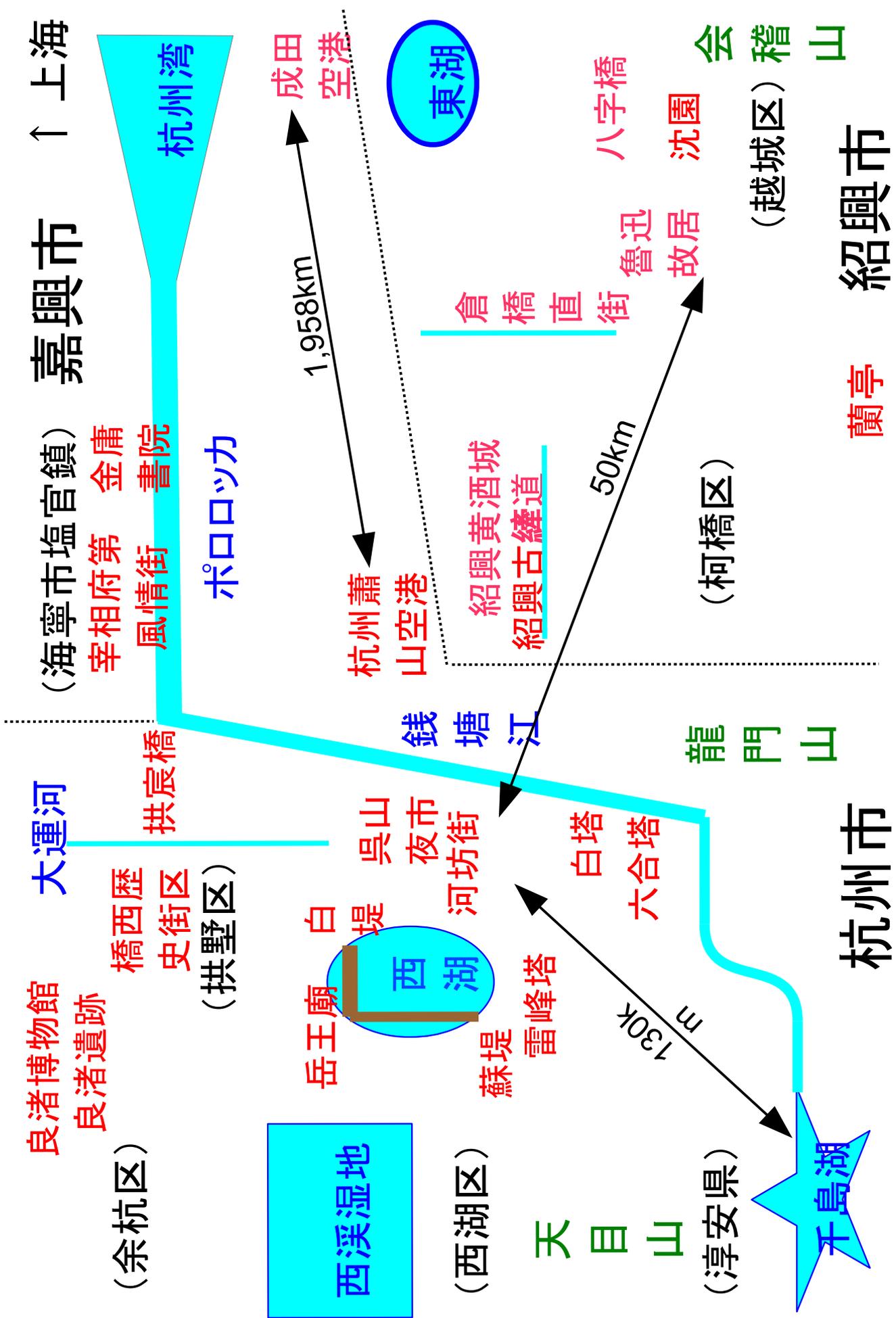
今回訪れる予定の浙江省北部は亜熱帯モンスーン気候に属し，日本の屋久島とほぼ同じ北緯30度付近にあるが，冬の気温は氷点下まで下がることがある。訪問予定の3月下旬は菜の花や桃の花も咲き，気候はよい。東経は120度なので，時計と太陽の動きとはズレはなく，3月下旬の日の出と日の入りは共に北京時間の6時である。

年間降水量は1,450mm程度(東京とほぼ同じ)，年間平均気温は約17℃で，高知や潮岬とほぼ同じである。3月の平均最低気温は7℃，平均最高気温は14.8℃，菜種梅雨の季節で雨の日が多い。

浙江省は人口も5,500万人と多い。北部は省都の杭州市(890万人)，紹興市(500万人)，寧波市(780万人)，嘉興市(460万人)など大人口を抱え，産業の発達した地帯である。

☆ 長江下流域と銭塘江・大運河

長江には黄河の「河」と同じく，もともとは一字名の「江」が当てられていた。漢代からは「大江」と称され，六朝時代に「長江」とも呼ばれるようになった。宋の蘇軾の『念奴嬌』という詞の出だしは「大江」から始まる。今は北方では「河」を，南方では「江」を河の名前の後ろに付けるようである。



なお、「揚子江」は大運河が長江を横切る揚州・鎮江付近から下流部の別称であったが、中国国外ではこの名称が長江全体を指すことが多く、かつて日本でも「長江」全部のことを「揚子江」と教えていた。ちなみに『三国志演義』には「長江」と書かれている。

銭塘[táng]江は安徽省黄山に端を発する全長 700km 弱の浙江省一の大河であり、杭州湾に注ぐ。杭州湾の形状が西を頭にした尖った三角形であるために、潮の干満によって大きな逆流が観測される。南米アマゾン(Amazon)河の有名な大逆流“ポロロッカ(Pororoca)”のミニチュア版である。中国語では「海嘯[xiào]」(地震津波にも同じ単語を使う)と呼ばれている。

隋の煬帝が民に多大な負荷をかけて建設した大運河は、北京近くから鄭州の上流で黄河につながる永濟渠[qú]、黄河から淮河までの通濟渠、淮河から湖沼地帯を通過して揚州で長江につながる山陽瀆[dú](邗[Hán]溝：呉が春秋末期の BC484 年に開鑿)、長江南岸の鎮江から杭州につながる江南河と合計 2,500km 余りになる。なお、現在の大運河は、明代に黄河付近では東に大きく位置を変えて開鑿され直されている。

さらに水だけの運河として、「南水北調」の東ルートが大運河を利用して 2013 年末に開通し、長江の水が天津や山東半島に供給されている。

☆ 交 通

鉄道や自動車が発達する以前は、「南船北馬」という言葉に代表されるように、淮[Huái]河以南の交通や輸送は、陸路よりも水路を使って行われてきた。

上述の大運河は、北京から黄河・長江を越えて紹興までつながる京杭大運河として一千年以上の間、江南の物資を中原に送る大動脈として働き、世界歴史遺産に登録されている。この運河による江南物資の北送なくしては、唐の長安や宋の開封の繁栄はなかったと思われる。浙江省北部では、いまでも安価な内陸水運の一部を担っている。

空路は、杭州市の紹興市寄りに杭州蕭山国際空港があり、成田空港および関西空港との間を一日一往復の直行便(ANA)が飛んでいる。今回の旅行も成田からこの空路を利用する予定である。

なお、羽田空港からの直行便がたくさんある上海虹橋空港に隣接する虹橋駅から高速鉄道に乗れば、杭州までは 1 時間かからないが、駅中での団体の移動がたいへんなので、成田までご足労をお願いする。上海の浦東、虹橋両空港と管制が重なるので、運が悪いと離着陸時に順番待ちになることもある。

鉄道の駅は杭州駅および杭州東駅(高速鉄道の駅としては国内最大級の 30 線路)があり、前者は在来線の駅であるが、虹橋や南京南からの高速鉄道にはこちらに着くものがありとても便利である。高速鉄道は、南へは紹興・寧波・温州・福州・厦門・仙頭・深圳、西へは南昌・長沙(将来は貴陽・昆明)へつながっている。さらに観光地黄山との間を結ぶ路線も建設されている。

国家級の高速道路は、東北吉林省長春を起点とし海岸線よりも少し内側を、天津・青州・連雲港・南京・杭州・龍岩・梅州・深圳まで 3,580km を走る長深高速(G25)が、南北に伸びる大運河に替る動脈となっている。

東西に走る高速道路は、杭州を起点とした杭甬高速(G56, 3,405km)が、黄山・景徳鎮・岳陽・尊義・昆明を通過して雲南省のミャンマー国境の街端麗まで続いている。さらに上海を起点とした滬昆高速(G60, 2,370km)も杭州・南昌・貴陽を経て昆明につながっている。さらに、杭州湾を上海・杭州・寧波・上海と一回りする杭州湾環線高速(G92)がある。

省級の高速道路は、S2, S4, S12, S13, S14などが杭州周辺の都市間や空港および観光地など近場を結んでいる。さらに杭州市と寧波市には市街環状高速道路がある。今回も市街地および観光地以外の移動はすべてこれらの高速道路を利用するが、朝晩の混雑は免れ得ない。

☆ 産物・美食と産業

浙江省北部の伝統的な産物はいろいろあり、宋代では周辺の各国はそれらの産物は垂涎の的であった。日本は日宋貿易でこれらを得ていたが、金は軍事的圧力で無償で献納させていた。

絹織物や龍井茶に代表されるお茶、紹興酒などは今でも重用されている。

中国八大名菜の一つである「浙菜」は数多くの名菜がある。その中の幾つかを挙げると、杭州では東坡肉(天香楼)、西湖醋魚(楼外楼)、龍井蝦仁、叫花鶏、魚頭豆腐、紹興では清湯越鶏、魯迅の作品にも出てくる醉蝦、家庭料理の徽乾菜燻肉など枚挙に暇がなく、今回の旅だけですべての名店を食べ回るのは難しいであろう。

産業としては、以前は絹織物など繊維製品や電機・化学関係などの工場が多かったが、現在はIT産業に重点が置かれ、Amazonの中国版のアリババは杭州で創業した。

日系企業の進出も多く、空路は観光客よりも商用客が目立つ。



東坡肉

西湖醋魚

叫花鶏

紹興醉蝦

二 歴 史

☆ 有史以前

今回訪れる予定である地域の古代史は、杭州市北部の余杭区にある良渚[zhū]文化遺跡から始まる。BC3,300~BC2,200年ごろにこの地で稲作文化が栄えたことが判明している。3個所の遺跡が見つかっているが、その時期以降のものはない。多分長江などの河川の氾濫や河道の移動などで、この地からの立退きを余儀なくされたのであろう。



良渚玉器

水田稲作(温帯ジャポニカ種)は、現在発見されている遺跡から推定される範囲では、洞庭湖な

どがある長江中流域で、野生の稲を栽培するところから始まったとされている。なお、水稻(温帯ジャポニカ種)と陸稲(熱帯ジャポニカ種)は別の種である。もちろん東南アジアの水田や焼畑で栽培されているインディカ種とも異なる。

長江下流域で発見された稲作文明は、現状では杭州湾南側の寧波市西北部の河姆渡遺跡が最古で、BC5,000~BC3,000年ごろに高床式の集落が形成されていた。保存庫から出土した籾の解析から温帯ジャポニカ種が多いことが解っている。

近年、長江に沿って稲作をする人々が築いた文明を長江文明として、北方の黄河文明と別途発達したと考られている。後期には互いに何等かの影響や人の移動・交流があったと見るのが穏当な考えであろう。

この地で稲作文明を築いたのはどのような系統の人たちであったかについては、遺骨の残存数が少ないために、他の地域の人々との関連などを含めてまだはっきりしていない。現在では混血や淘汰が進んでしまっているが、中国のいわゆる南方人という、弥生系の日本人ともよく似た背格好や顔だちをしているので、血縁の距離はそう遠くないかもしれない。

☆ 古代から秦代まで

江南の文明の話は、突然周代まで飛ぶ。当時、長江地帯に建国していたのは粽の由来で有名な屈原がいた楚である。楚は長江中流域の湖南省と湖北省に基盤を置いていた。ただ、楚がどのような人々から成り立っていたのかは明確ではないが、今の苗族の祖先だったという説が、墓での埋葬の仕方など多くの証拠からも有力である。楚は春秋時代から盛んに中原の諸国と関係を持ち、支配者は「~公」ではなく周室のみが使っていた「~王」と名乗っていた。

これに対し、下流域では呉と越が春秋時代末期に台頭した。呉は蘇州(呉)に都を置き、越は紹興(会稽[IT])に都を置いた。この両国は「臥薪嘗胆」、「呉越同舟」などの四字熟語や美人の西施らを使つての呉王の籠絡などの故事を生んだことから明らかなように、常時戦争状態にあった。

歴史書によれば呉の君主は姫姓で、周王室の分家となっているが、その民は刺青をしていたと

昔の江南人と古い弥生(渡来)人

日本で栽培されている水稻は遺伝子分析の結果、朝鮮半島経由ではなく、江南地方から直接伝来したと見られている。それは朝鮮半島にはない系統の水稻が日本では多く栽培されているからである。すなわち、江南に8種類ある水稻の内、日本には3種類しか伝わっていない。3種の中の1種が、7種類も伝わっている朝鮮半島の水稻には欠けている。

もちろん籾だけが伝来するわけではなく、それを携えた人々も江南から九州へ渡ってきたと見るのが自然である。出土した調査対象数は少ないが、春秋末期(BC500年頃)の墓の江南人のY遺伝子(男性のみに遺伝する)と、九州北部と山口県の墓のY遺伝子が完全に一致した例がある。

この江南人のY遺伝子(O2b1型)は、中国大陸ではすでにほぼ絶滅し、日本人の約25%とベトナム人の14%に残っている。この型は韓国にも12%いる(北部朝鮮にはほとんどいない)が、さらに下位の分類を見ると、大和人と琉球人にはO2b1aが圧倒的に多く、韓国ではO2b1bが圧倒的に多い。

上記三つの証拠から、弥生人の中で最初に水稻耕作を運んできた渡来人は、朝鮮半島経由ではなく江南から直接渡来したと見られている。

日本には、水稻をもたらした古い渡来人と朝鮮半島経由を含む新しい渡来人(約16%、Y遺伝子が華北人と同じO3型)がいる。江南の地は、日本の多くの弥生系人の故郷であると言える。

記されているので、中原の華夏族が南進した訳ではないと考えられている。一方、越の君主については周王室との関係は記述されておらず、その民は長江下流域に住んでいた百越と言われた稲作漁労民であったと推定されているが、河姆渡遺跡を作った民の後裔かどうか不明である。百越族は南進した華夏族に飲み込まれたか、消滅したか、逃散したかも明らかではない。

呉王夫差は中原まで覇を唱えに遠征した絶頂期に越王勾踐に滅ぼされた。呉の遺民が越による皆殺しを避け、海路日本に渡来したとすると、物語は面白いし、最近改訂された弥生時代の始まりの時期とも一致するが、証拠はない。

漁労民が多かった越の民は、造船・操船技術に優れ、海へ乗り出していた。その後越は船も使って、山東半島の付け根の琅邪[Lángyá]に都を移し、やはり中原に覇を唱えた。しかし、最後はBC306年に楚によって滅ぼされた。

秦の始皇帝が不老不死の仙薬を求めるために、巨船の船団で徐福を東海の蓬莱山に派遣した、と史記に記載されているが、真偽のほどは明らかではなかった。日本の各地にも徐福伝説が数多く残っているが、具体的な出土品を伴わず、日本の古い史書にも徐福についての記載はない。

しかし1980年代に、琅邪付近で徐福村の再発見や秦代の造船所跡が発掘された。巨船は越の遺民の技術で建造された可能性がある。徐福船団の一部は琅邪から新しい渡来人として日本に辿りついている、というロマンを語る日本の徐福研究愛好家もいる。渡来人の一部は会稽の百越族かもしれない。

☆ 漢代から唐・五代十国まで

始皇帝の中国全土の制覇後、江南の地は都から遠くなったが、三国・六朝時代の呉・(東)晋・宋・斉・梁・陳が、再度江南の南京(建業、東晋以降は建康と称した)に都を構え、南朝文化が栄えた。

楊堅が北周を乗っ取って隋を立て、さらに隋を滅ぼした唐が長安に都を置くと、政治の中心地は江南から北方に移った。安祿山の乱以降、唐後期から唐末には節度使が力を得て独立し、五代十国の混乱の時代に入った。南方では十国の呉が長江北岸の揚州に、呉越が杭州(銭塘)に、呉から禅譲を受けた斉のち(南)唐が南京(金陵)に都を置き、江南の経済・文化は大いに発展した。

なお、日本と呉越とは遣唐使の往来が途絶えた平安中期に、数回の交流がある。元々遣唐使船は後期には寧波や長江河口付近で上陸し、水路と陸路で長安に向かっていたので、この地に安定

江南地域に都を置いた国々 (地名は現在のもの)	
中原	江南
— 春秋戦国時代 —	
東周(洛陽)	呉(蘇州), 越(紹興)
秦(西安)	中原王朝の支配下
西漢(西安)	〃
東漢(洛陽)	〃
— 三国時代 —	
魏(洛陽)	呉(南京)
西晋(洛陽)	中原王朝の支配下
— 南北朝時代 —	
五胡十六国	東晋(南京, 以下同)
北魏(洛陽)	宋 齊 梁 陳
隋(西安)	陳
唐(西安)	中原王朝の支配下
— 五代十国時代 —	
五代	呉越(杭州)
北宋(開封)	中原王朝の支配下
	南宋(杭州)
元(北京)	中原王朝の支配下
明(南京→北京)	〃
清(北京)	〃
臨時政府(北京)	〃
	民国(南京, 国民党)

政権ができたことでの交流再開であろう。

☆ 宋代

五代十国の混乱をおさめた宋は開封に都を置き、江南の物資を大運河で運びこんで繁栄した。女真族の金に都を逐われた(北)宋は、運良く難を逃れた宋室の皇子を立てて、杭州(臨安)に都を移し南宋となった。10万ちょっとだった臨安の人口は、急速に脹れ上がり100万都市になった。

ちなみに、曲亭(瀧沢)馬琴の長編読本『南総里見八犬伝』は、北宋末に武侠英雄が活躍する白話本『水滸傳』に真似て、『後漢書』からヒントを得て書かれたものである。江戸後期の『水滸傳』人気は大したもので、刺青や火消し装束の裏地の絵に『水滸傳』の英雄たちが彫られたり描かれたりしている。この“南総”も江戸時代の通例であった“見立て”で、「南宋」をもじったものである。

北宋時代から日宋貿易が盛んになり、南宋では都臨安の建設のために日本から大量の木材を輸入した。その他日本からは銅・銀・水銀や硫黄・日本刀なども輸出され、南宋からは銅銭・陶磁器・絹織物・書籍・絵画・文具・香料・薬材などが輸入された。平家は日宋貿易に関与することで大いに栄え、日本の文化水準も非常に高まった。日宋貿易は南宋が元によって潰走させられるまで続いた。

☆ 元明以降

元は北京(大都)を都としたので、江南は単なる物資の調達基地となった。なお、元を訪れたマルコ・ポーロ(Marco Polo)の『東方見聞録』にも、杭州の街の様子が書かれている。

明が元を北に駆逐して南京に都を定め、中国の歴史上始めて江南に端を発した王朝が中国全土を支配した。たが、太宗の子に反旗を翻した永楽帝が政権を篡奪し、都を北京に移した。

元代になると日元間で朝鮮半島沿いに私的な貿易が行われ、略奪などもあり、倭寇とも呼ばれていた。明はこれを禁止する海禁政策を採っていた。一方では、巨船を建造し鄭和などにアフリカに至るまで対外進出も押し進めさせた。後には倭寇と称する海賊が勝手に貿易をしたり、略奪をした。後期倭寇の実態は、沿岸の明人が化けたものが90%だという。

江戸時代初期にいわゆる鎖国政策で正式貿易の御朱印船貿易が廃止されてからは、日本と清との間は寧波から来る清国船による長崎での交易が主になった。杭州産の高級絹織物は非常に高値で取引されたと言う。

以後の歴史は、近現代史の分野になるので省略する。

なお、杭州は都になっていた期間は短いが、その文化的な影響力の故に、四大古都に開封と杭州を加えた中国六大古都の一つと数えられている。

三 観光地

今回の旅行では江南の水辺を廻って、長い間中国一の農業および手工業の生産力を誇り、呉越以降の中国南方文化の揺籃の地となった雰囲気や美食を味わいたいと思う。以下日程順とズレるところもあるが、訪れる予定の場所を主に、この地の見所について紹介する。

◎ 千島湖（杭州市淳安县）－◎印は第3回旅行では訪れていないところ－

千島湖は、杭州市の南西の白際山・千里崗・昱[Yù]嶺などの丘陵に囲まれた銭塘江の上流に1959年に作られたダム湖(新安江水庫)である。面積は567.4 km²で琵琶湖より少し小さい。湖面の標高は108mと低い。

最大の特徴は、ダム湖に水没しなかった多数の丘の頂が島としてダム湖内に残っていることであり、その数は1,078もあり、この種の湖内島の数としては世界最多である。水質もよく、「天下第一秀水」の称号もある。

杭州市内から130kmほどの距離にあり、日帰りの観光地としても有名である。山の松島とも言える。台湾からの観光客が多く、過去彼等が水賊の被害に遭ったことがある。

経路途中の周辺の丘陵にはお茶が植わっている。

★ 西湖とその周辺（杭州市西湖区）

－蘇堤・白堤・六和塔・雷峰塔・白塔・岳王廟－

西湖は、名前の通り昔の杭州城の西側に隣接していて、湖の西側と南側は小高い丘陵になっている。中近世以降、風光明媚な場所として中国中にその名が知れ渡り、世界文化遺産にも登録されている。

湖の面積は6.39km²で、日本の山中湖や芦の湖よりすこし小さい。周囲は15kmあるが、蘇堤や白堤を経由すれば、自転車でも小一時間で一周できる。なお、日本でも庭園や池に西湖を模した造りが多い。

西湖自体は、古代銭塘江が大きく河川敷を拓げていたところに、2千年ほど以前に周辺の丘陵からの土砂によって分離され残った河跡湖(三日月湖)である。そのためすぐに埋まってしまうので、常時浚渫が必要である。さらに山側への拡張工事も行われた。

唐代に杭州刺史に赴任した白居易(楽天)も浚渫を行い、掘りあげた土砂で今も残る白堤を造った。唐滅亡後の五代十国の呉越は都を杭州に置いて仏教を盛んにした。この時に、西湖の周辺に六和塔・雷峰塔・白塔などたくさんの寺院が建立され、西湖も浚渫・整備された。

宋代には開封での政争に破れ杭州知事となった蘇軾(東坡)が、荒れていた西湖を修復し、浚渫の土砂で蘇堤を造った。

南宋の將軍で北方を占拠した金に対して気を吐いていた岳飛は、金との講和の密約で処刑された。その後、中国では救国の烈士として、関羽と共に尊敬を集めている。岳王廟は西湖の北西にある。

西湖周辺は基本的に自由行動とするが、蘇堤は行く予定である。



千島湖



茶畑



岳王廟



六和塔



蘇堤



雷峰塔

銭塘江を望む六和塔は南宋代の塔身が残されていて、清末に保護する建物が外側に造られた。

◎ 河坊街と呉山夜市（杭州市西湖区）

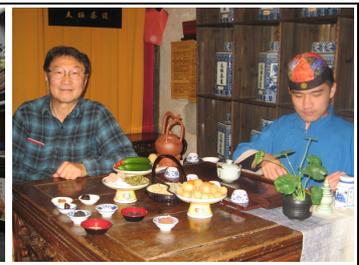
西湖の中央から東にある河坊街は「老街」で、南宋の街の雰囲気や当時の場所に再現してある。南宋代から清末まで商業地区として繁昌した場所で、清代の建築も多く残っている。自由行動で散策する予定である。

10年近く前のTV番組“世界うるるん滞在記”で、俳優の和田正人が修行した太極茶道の店が街路の中ほどにある。この店では本格的な茶館の雰囲気を味わいたい。自由行動で立ち寄る。

北宋の開封は不夜城の街であり、中国の夜市はそこから発祥したと言われている。杭州の夜市は西湖の東にある呉山夜市が有名であるが、とても狭くて混むので、外国人観光客が行くには安全や言葉の上でも覚悟が必要である。



河坊街



太極茶道



呉山夜市

◎ 西溪湿地（杭州市西湖区）

西溪湿地は、西湖の西約5kmにある市街地の中に残された多数の池と水路からなる湿地であり、面積は西湖の倍程度である。緑豊かで烏鎮などの石造りの水郷の街とは異なる、古い江南の水辺の村の雰囲気が保存されていて、遊覧船で回遊したいと思っている。



西溪湿地



舟で遊覧

◎ 良渚博物館（杭州市余杭区）

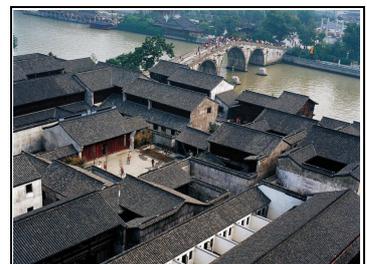
三ヶ所の良渚遺跡群からの出土物(玉器・陶器・石器・木器・獣角器)を中心に、当時の生活などをパノラマ表示で再現した博物館である。時間がないので今回は立ち寄る予定はない。

発掘遺跡では大きな柱穴列が発見され、祭壇跡や大量の玉器からみても、かなり力ある権力者がいたと推定されている。

◎ 橋西歴史街区（杭州市拱墅区）

西湖の北方約10kmにある大運河に架かる拱宸[Gǒngchén]橋と橋の西側に広がる倉庫街は、清末まで杭州の水運の大きな基地であった。

橋の東側には京杭大運河博物館もあり、ここを含めて大運河の多く関連施設が一括して世界文化遺産に登録されている。



橋西歴史街区と拱宸橋

◎ 海嘯と金庸（嘉興市海寧市塩官鎮）

銭塘江のポロロッカは旧暦8月18日の正午ごろに、最大潮位を迎える。この時は上



海嘯



杭州市内の観潮建物

流の六和塔付近でも十分見学できる。

事実、杭州国際会議センター横の左岸に、河上に突き出した常設の巨大な観潮建物があり、数万もの人が2層のガラス越しにポロロッカを見ることができる外、土手の上にも手摺り付きの道が伸びている。



金庸書院

宰相府第風情街

今回は、潮位が1m程度と低い春でも見易いように、古くから観潮場所として有名な塩官鎮へ行く。この街は製塩で栄えて来た。名前の通り国の専売品である塩の生産を管理する役所があった。清の乾隆帝は、ポロロッカを見に何回もこの地を訪れている。

この街は香港在住の武俠小説作家金庸の生れ故郷であり、かれの作品の内容を中心とした金庸書院が2010年に開設された。作品の全36巻はすべて完全架空の武俠物で、何回も映画化やTVドラマ化され、華人社会で知らぬ人はない大衆時代小説作家と言われている。なお、原文はかなり難解で格調が高い。科白も時代がかっている。塩官鎮にある宰相府第風情街は、製塩で栄えた街の姿を残す「老街」である。

☆ 東 湖（紹興市越城区）

東湖は紹興市街の北東約3kmのところにある人造湖である。もともと高さ50~60mの青石の岩山であり、隋唐代からは大規模に石材を切り出し、地下20m以上も掘った跡に水を引いて庭園としたものである。



東湖烏篷舟

西湖よりもはるかに小さいが、掘り残した絶壁や奇岩の中を足漕ぎの烏篷舟で周遊できる。

今回は別の場所で船に乗る機会が多いので、時間の関係もありここには立ち寄る予定はない。

★ 蘭 亭（紹興市柯橋区）

紹興市街の南西約13kmにある蘭亭は、東晋の書聖王羲之[xī]之が住んでいた場所で、353年に「曲水流觴[shāng]」を開催したことで有名である。亭内には、その時の詩集の序文『蘭亭序』の書碑が建っている。



蘭亭曲水

日本でもこの真似をして、奈良・平安時代の貴族達が、盃が流れて来るまでに和歌を一首詠む“曲水の宴”が持たれた。今でも、京都伏見の城南宮の楽水苑や太宰府天満宮では毎年神事として開かれている。蘭亭の曲水に立って、六朝文人の気分を味わいたい。

◎ 沈 園（紹興市越城区）

沈園は南宋代から続く沈氏の別荘の庭園である。園内の葫蘆池は宋代のままであるとされている。沈園は南宋代の詩人陸游の悲恋物語の現場として有名であり、往時の面積は残っていないが、紹興一の名園



沈 園

である。場所は市街地の中にあるので、時間があれば寄りたい。

◎ 倉橋直街（紹興市越城区）

倉橋直街は市の中心部の西寄りに南北に走る水路に沿う、昔の紹興の風情を堪能できる数100mの「老街」であり、宿泊予定のホテルから近いので自由散策したい。

☆ 魯迅故居（紹興市越城区）

魯迅(周樹人)は紹興の人で、仙台医学専門学校(現東北大学医学部)に留学していた。『藤野先生』という小説に、“医学では一人づつしか治せない、今は中国人の心を治すのが大切だ”と悟った原因となる留学中のエピソードが書かれている。故居の中に入って展示を見ることはせず、時間があれば外から場所を確かめる予定である。

★ 紹興黄酒城（紹興市越城区）

紹興酒は日本酒と同じくお米から作った醸造酒である。黄色をしているので黄酒とも呼ばれている。黄酒を醸造して甕に詰めて年月を置くと、葡萄酒などの醸造酒と同じく味がまろやかになる。それを「老酒」と言って黄酒の代名詞になっている。

黄酒城では紹興酒の販売・試酒はもちろん、作り方などの展示も見られる。ただし、甕は非常に壊れ易いので、預け荷物に入れずに空港の出国検査後に買い、機内持ち込みにするほうがよい。

ちなみに日本酒は醸造したての酒を漉して発酵菌や雑菌を取り除き、さらに火入れをすることで、新酒でも十分美味しい。日本酒も古酒にすると琥珀色になり、とても美味だが、作っている醸造元は非常に少ない。

★ 八字橋と紹興古緯道（紹興市越城区と柯橋区）

この二つは世界遺産の大運河の蕭山紹興段に含まれている。

八字橋は大運河に八の字型に架かっている。沈園から遠くない街中なので、歩いて橋を渡ってみる予定である。

大運河を航行する船は、流水があればそれに従い、帆を持つ船は帆行した。風や流れが利用できないときは、小型の船は櫂や竿で移動できたが、大きな船は運河の河岸から綱を引いて動かした。

船引きのために運河の河岸には石畳が敷かれていた。紹興古緯[qián]道はその遺跡で、世界遺産の一部になっている。場所が紹興の市街地から北西に15kmほど離れているが、黄酒城からは近いので、時間が取れば立ち寄り。



倉橋直街



魯迅故里



黄酒城



八字橋



紹興古緯道

文責 日中学院校友会旅行委員 猪飼國夫